

成果報告書

記入日 2016年 4月 15日

氏名 白石奈津子	渡航先国名 フィリピン共和国	所属機関 フィリピン大学 第三世界研究所
研究テーマ：集団性と互酬規範の再検討：フィリピンにおける資源利用をめぐる民族間の日常政治から		
研究期間： 2014年 6月～ 2016年 3月		
<p>■■ 研究成果（概要） ■■</p> <p>フィリピン農村空間にみられるエスニシティなどの差異と、文化的過程を含んで行われる資源共有とに着目し、<u>awa(憐れみ)</u>という概念および倫理観によって、<u>社会空間が動的に安定を維持する様を見出した。</u></p>		
<p>■■ 研究成果（詳細） ■■</p> <p>研究背景：農村社会空間における共同体秩序と他者</p> <p>これまでのフィリピンの農村社会空間をめぐる研究では、ローカルな主体による日常の抵抗などを論じる研究が90年代を中心に多く見られた。一方そこでは、先住民などの共同体にとって異質な人々による、政治経済のミクロな交渉や位置取りの実践に関する分析的研究が不足していた。こうした土地の先住者や山地民と流入・移住民との間の協力／対立を内包する関係の政治経済的な重要性については、すでに Helbling&Schult(2004), W.Scott(1982)などの研究が示しており、その実態の分析は地方の社会経済・文化を理解するために重要である。</p> <p>本研究は、そうした膨大な先行研究で描かれた農村共同体秩序の中に、土地の先住者としての「異質な他者」がどのようにして食い込み、また、秩序の側がそれをどう受け止めるのかを明らかにする。言い換えるならば、現代的コンテクストにおける共同体秩序の維持、Kerkvliit が <i>What is just / Who has right (to do something)</i> (Kerkvliit 1991)と表現した共同体内での倫理について、その共有されている社会性のモードや道徳性、およびそれを可能にするコミュニケーションの技法を明らかにすることを課題とする。</p> <p>研究課題と分析枠組み</p> <p>本研究は、フィリピン、東ミンドロ州の、低地民タガログ(Tagalog)／山地民マンヤン(Mangyan)と呼ばれる人々が生きる社会を取り上げ、特に、マンヤンがタガログの圃場で行う落穂拾いとその周辺で生じる社会関係に着目して分析した。</p> <p>本研究の課題は、ここで展開される<u>接触と相互交渉の場面から、農村社会システム内部における位置取りの攻防と、それを支える倫理的意味付与の実践を動的に分析することである。</u>特に、農村社会内部における<u>エスニシティの発現を動的に検討</u>するために、そこをひとつの社会空間と捉えた上で【文化・社会・経済的サブシステム】(杉浦 1998)という概念を分析枠組みとして導入した。この概念を用い、<u>諸々の棲み分けが形成されるプロセス、関連する経済的要因や論理、文化行為としての意味付与の実践を複合的に検討した。</u></p> <p>調査地概要</p> <p>調査を行ったのは、フィリピン南部ルソン地方、東ミンドロ州バコ町に位置する低地稲作集落である。集落で実施した悉皆調査によれば、人口およそ1500人であり、24歳以上の平均就学状況は小学校卒業が最頻値である。就業状況は、農業の専業世帯、兼業世帯、非農家世帯がそれぞれほぼ同一割合で混在しており、無収入世帯も一定数が見られる。</p> <p>ミンドロ島は、20世紀初頭のアメリカ統治期から急増した移民により現在の低地社会および経済が形成された旧フロンティア社会である。島の先住民とされるマンヤンは、この移民増加の過程を経て、争いを避けるようにして居住地を山間部深くへと移していったとされる。現在も、1997年に制定された先住民権利法に基づき、「先祖伝来地」とされる土地の権利取得に向けた活動が、NGOなどの支援により続けられている。</p>		
		
		水牛は今も、稲作になくても存在

経済活動における棲み分け

調査地においては、マンヤンと低地民との間で、経済活動における一定の棲み分けが見られる。具体的には、草刈り、稲刈りを中心に、果実の収穫、工事の際の土砂運びや災害時の泥かきといった身体的負荷の大きな作業において、マンヤンの労働力が重宝される。これらの仕事は決してマンヤンのみの仕事ではない。だが、タガログとの労働を比較した際、彼らの労働耐性や仕事効率について、肯定的な意見も多く聞かれた。

落穂を拾うということ

次に落穂拾いについてである。落穂拾いとは、稲刈りの後に圃場に残された稲穂を拾い集める作業である。調査地における落穂拾いには、脱穀機が動き始めたら拾ってよいなどの一定のルールが存在する。だが、基本的には圃場主に断りを入れる必要なく、人々は落穂を拾う。

こうした落穂拾いによって得られる食糧は、マンヤンの生計にとって非常に重要な位置を占める。ある女性は、半期に20カバン(1カバンは約60kg)もの籾を落穂拾いで得たという。これは、調査地において、2haの圃場での生産に分益労働として一作付期間関わって得られる取り分にはほぼ等しい量となる。ゆえに人々は、2、3か月に渡って低地に移り住み、落穂を拾う。

以下は、落穂ひろいをめぐる圃場主達の語りである。

“…落穂を拾ってるだけなのに、けちけちするの？悪いことよそんなの。禁止なんかしたら、落穂拾っている人たちのことを助けられないじゃない。…ちょっと親切にしてあげただけよ”(40代女性)

“拾わなかったら捨てるだけ。…もともと俺たちは拾わない、捨てるだけのものを、どうしてわざわざ禁止したりするものか”(60代男性)

“彼らは畑がないんだもの、可哀想じゃない”(30代女性)

“私は以前、自分も落穂ひろいしたよ。全部合わせて4カバンも拾えちゃった。それを売って、このキャビネットを作ったの。…でもそういう何か欲しいものとかがない限りは、わざわざ拾わない”(50代女性)

こうした語りからは、落穂を拾うマンヤンに対する、憐みや貧しき持たざる者への施しといった社会道徳の実践が垣間見える。それは特定の関係を持った個人に向けられた互助関係の形成ではなく、より全社会的善行の実践ととらえられる。また、4つ目の語りからは、人々が落穂を拾うことによって得られる利益についても十分理解していることが見て取れる。では、何が彼らに道徳の実践を促すのだろうか。

未知性が生み出す畏怖の念とタガログ社会におけるマンヤン

“…俺たちは何も、全てのマンヤンを差別している訳じゃない。一緒に仕事をするようなマンヤンとだったら、食事だって同じものを食べる、同じ皿から食べる。だが、彼らは違う、何かを持っている、何を持っているかわからない。そういうのには、近寄らないのが一番なんだ。わかるか”と話すA氏。隣で聞いているBも、同意したように「そう、それが sumpa (という種類の呪い)」といていた。また、「彼らはそういうものがうまい (marunog)」と。とにかくそろって、得体のしれないものには近寄らない方がいい。それが懸命だという。(フィールドノートより 2015. 8.21)

上に示したのは、病気にかかった友人のマンヤンを私が度々訪問していた際、ステイ先の家族からかけられた言葉である。また、次に記すのは、マンヤン自身が語ったかつての低地民との関係についてのインタビューの一部である。

“タガログは、マンヤンに呪いをかけられるのを怖がっていた。私たちは、昔は本当に汚いなりをしていたからね。…だからタガログはマンヤンと友達になりたがった。友達になったら呪いをかけられないから。服をくれる人もよくこんな風に言っていた「頼むから(自分たちが着ているような) こういう服を着てくれ」って。自分たちとは違う姿をした私たちが怖かったんだよ”

以上のような語りから見えてくるのは、マンヤンが低地社会でしめている文化的ニッチは、単なる言語や有形のものとしての文化(ふんどしを身に着けた姿やビトルナツを噛む習慣など)だけでなく、それらが可視化する彼らの他者性、すなわち低地民にとっての「共有されていない知」の中に彼らが生きているという問題である。言い換えるならば、マンヤンは低地社会の「記憶・知のコミュニティ」の外部に生きる存在として、そこから生じる畏怖と包摂不可能なものとしての他者性を常にまとっているのである。



上: 手作業で稲刈りを行うマンヤン男性
中: 脱穀機が動き始めるのを待って木陰に待機するマンヤンの人々
下: 落穂を拾う老年のマンヤン女性

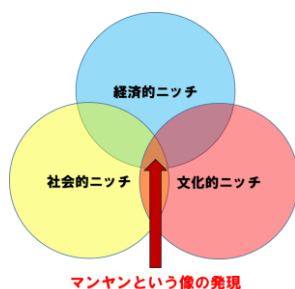


ビトルナツを噛んだ口は真っ赤に染まる

考察と結論

落穂拾いを許容するタガログたちは、そこに、マンヤンに向けた憐れみ(awa)や助ける(tulong)という意味を与えていた。この awa を与えるべき他者としてのマンヤンに向けた眼差しは、他の日常生活の場面においても多用される。この時、awa という感情のポリティクスの発現は、資源を与える側からの非対称な関係性の強調や、社会の下層を生きる人々へ向けた他者性の強化、同一意識からの排除も促した。

この状況を杉浦が提示したサブシステムの形成として分析すると、以下のような整理が導かれる。



【**経済的サブシステム**】 ニッチ的資源利用としての落穂ひろいや労働を担う存在

【**社会的サブシステム**】 awa を投げかけ、助けるべき貧者、他者としての位相

【**文化的サブシステム**】 自分達の共有する知の外側から働きかけを行ってくる存在

タガログから見たマンヤンというエスニシティは、この三つのサブシステムが重なり合ってみえる景觀に発現していると解釈される。経済的サブシステムにおける労働の固定や賃金の不公正は、それ単体で存在した際、社会における不和・不安定性を増長させていく可能性がある。しかしそこに人々は、憐れみという社会道徳を伴った社会サブシステムの機能を与えている。同時に、こうした施しを人々に促す、文化的他者、未知性への畏怖という関係性も見出されたが、その恐怖も憐れみという説明が全体に与えられることによって、力関係の説明・理解における逆転と緩和が引き起こされる。このように、awa の意味付けによる経済・社会・文化サブシステム間の補完性は、社会空間での生存権に対する保障・承認を伴い、差異の発現による社会的摩擦の可能性を軽減し、静態的にも見える安定性を社会空間に生じさせていた。

他方、マンヤンの側から見たとき、彼らは社会サブシステムに与えられた憐れみの位相を引き受けず、そこにすり抜けるような解釈を与える。また、山地へ戻るという選択を含め、彼らはホスト社会のサブシステムに固定化されることからの逃避可能性を常に確保している。さらに、例えば農作業の場面に転じて見たとき、マンヤンは awa を受けるだけの社会存在ではなく、社会空間を共に構成する隣人的な主体として立ち現われる。

つまり、サブシステムの位相は絶対的、固定的ではなく、そのあり方は揺らぎをもつ。そして、こうしたサブシステムの揺らぎや隙間にこそ、人々による戦略的・主体的な行動選択と、新たな意味付与の余地が生じ、そこで実際にエージェンシーが働くときに、社会空間は動的な実相を明らかにするのである。

以上のように、これまでの研究は、農村社会空間にある様々なファクターの上に、諸サブシステムが意味付与の過程を伴って形成され、動態性と安定性を同時に成立させること、および、そこでのエスニシティの発現とその意味を、それぞれの要素の連関から立体的に描き出した。



自ら拾った落穂をマンヤンの親子に渡すタガログの子供

awa 概念については、既に、Cannell(1999)が、フィリピン社会の文化特性にとっての重要性を明らかにしている。先行研究において awa は、力を持たざる者がその不足を補うために、力を持つ者にアプローチする際のキーワードとして用いられていた[Cannell 1999, Kerkvliet 1991]。だが、本事例において「awa が取り持つ二者間の人間としての平等性」は、それ単体で存在しているのでも、固定的な個人間で見出されるものでもない。本事例における awa は、未知性を伴った他者への畏怖と関係性を逆転の形で説明づけつつ、社会における他者の排除と包摂 (=社会的サブシステムの形成と生存権をもつ人間存在としての平等の承認) を同時に成立させる重要なキーワードとして見出された。

今後の課題と研究の見通し

今後は、Awa や Tulong といった社会関係性を説明する倫理観の他の場面での発現との比較や、エスニシティ間で見られる政治環境へ向けた交渉の在り方などに分析を広げ、より総体的な形で、地方共同体における他者の包摂と排除に関するローカルな論理を描いていくことが課題である。

【参考文献】 Kerkvliet B.J. 1991. *Everyday politics in the Philippines.* / 杉浦直. 1998. 「エスニシティの地理学—方法的展望—」 / Helbling J&Scult V. 2004. *Mangyan survival strategies.* / Scott, W. H.(1982). *Cracks in the Parchment Curtain and Other Essays in Philippine History..* /Cannell, F. 1999. *Power and Intimacy in the Christian Philippines.*

■■ 留学中の生活・研究でのトピックス ■■

留学中の生活

留学中は、基本的に「低地社会」と呼ばれるタガログの人々の集落に暮らしつつ、定期的に、修士論文作成時にお世話になった山地集落を訪問することを繰り返していました。

当初は、本来の研究トピック、および自分の専門である農業の現場について行って日々の観察をしようと思っていました。ところが、現地暮らししてみると想像していた以上に、農業は「男性の場」でした。フィリピンという国は、一般的に開放的な社会のイメージがあるかと思いますが、私が暮らしたような地方社会においては、男女のジェンダー差による社会規範、分別のようなものが比較的明瞭に置かれていました。それによって結局、女性が集う場を中心に日々の生活を過ごすようになったことは、研究のためには心残りとなりましたが、ジェンダーに関する日本社会との価値観の差を様々な側面で感じたことは、今後の研究生活にも糧になると思います。

留学中に起こった忘れられない出来事は、何と云っても台風の被災経験です。2015年12月、フィリピンに襲来した台風ノナによって、暮らしていた集落は胸までつかれるほどの浸水被害を受けました。幸い、ステイ先も含めて周辺では一部の家財道具が水没した程度の被害で済みました。この台風被災の際に、人々の感情や噂話、また物資の受給に関し、被災という経験が明らかにする、日常の裏に隠れた社会の姿を垣間見ることができ、たいへん多くのことを学びました。



上:ステイ先で収穫作業の手伝い
下:水が引いた後の家。テラスに避難させた米袋も、半数が水に浸かった

研究でのトピックス

はじめて低地社会の側からそこに訪れるマンヤンの人々、および彼らとタガログの人々の関わりを見たときの印象は、目の前にいるのに確かに何かに隔てられているという意味で「まるで薄いカーテンの向こう側にいるよう」というものでした。それでも、農作業の合間にコーヒーを飲む際などに、気軽に冗談を交わしたりしている姿も同時に目にし、彼らの距離が遠いのか近いのか、長い間、その関係の在り方をどう解釈していいものか悩みました。

契機になったのが、台風の際に耳にした、小汚い老婆に化けた災いをもたらす精霊についての噂話です。フィリピンの地方社会では、そうした人非ざるものに対する恐怖、彼らを疎かにすることがもたらす災厄への恐怖が今も生き生きと存在します。それを機に、以前にメモした事柄が、一つのつながりを持ちました。思い返すと、私がマンヤン集落で調査していたことを聞いた人々は、いつもまず「怖くないのか」と聞いてきました。長い間その意味が分からず、とても不思議に思ったものです。

低地の人々にとって、マンヤンに近づくことは、そうしたある種の緊張と距離をもったカーテンをめくり、共通道徳としての「隣人を助け、憐れむ」という行為を実践することでもあったのです。こうした整理を通して考えることで、現地で目にしたタガログの人々の行動（日常的にひどく差別的な発言をするにも関わらず、様々な面で単発的な温情的接触が存在する様）に、納得のいく全体像を見いだせたように感じます。こうした理解は、長期にわたって生活をともにしたことによってこそ得られた結論だったと考えます。

■■ 今後の社会貢献 ■■

私が留学していた二年間、政権の方針の変化により、海外からの移民労働に対する注目が様々な形で増したように感じます。それは、かつて「エンターテイナー」と呼ばれた女性労働者を大量に送り出したフィリピンでも同じでした。何度も「日本に出稼ぎに行きたい」「日本はいつオープン・カントリーになるの」と聞かれました。

今後、日本国内における海外からの就労者やその家族の増加は、もはや食い止めることのできない事象でしょう。そのような中、出稼ぎ労働の先進国であるフィリピンの人々は、率先してそのチャンスをつかみにくると考えられます。その過程において生じる居住コミュニティでの人間関係、子供たちの就学におけるハンディキャップは、現在もすでに顕在化している問題です。

自身の研究成果としての共同体の在り方に関する理解を広く社会の言論空間に提示していくことは、大前提として私に課せられた社会貢献と考えます。そのうえで、フィリピンと日本という二カ国をまたぐ形で言語をはじめ多くのことを学んだ成果を、上記のような人々のサポート、受け入れ社会との摩擦軽減への取り組みといった社会活動への参加として生かしていきたいです。

